

【書評・紹介】

舟澤（濱野）あずさ（編著）、雫森ゆかり、松本結樹（図版・イラスト）

『きのほん vol.YOAKE』

（雨とブッキーニ舎，東京，2021年，A5判，210ページ，1,200円，第1刷）

井上 淳生



本書は、「きのくに子どもの村学園」（以下、きのくに）の卒業生が編んだ、学校と学び、そして生きることをめぐる探求の軌跡である。

「きのくに」とは、子どもの主体性を最優先にした教育を目指し、教育学者の堀真一郎によって設立された私立学校である。「子どもを真ん中に置いた」学校として、今からちょうど30年前に和歌山県の認可を受けて開校した。きのくに子どもの村小学校は、その後、中学校や国際高等専修学校の開校を経て、現在は全国5県の計10校に加え、スコットランドにも3校を構えるに至っている。

ミーティング等を通して子どもたちが自分で決めること（自己決定の原則）、子どもの興味関心に沿った活動を重視すること（個性化の原則）、身体経験を通じた学びを重視すること（体験学習の重視）が教育の柱である。特筆すべきは、

いわゆる国語や算数に相当する「基礎学習」のほかに、「プロジェクト」という学習に多くの時間が割かれている点である。

「農業」や「料理」、「演劇」といったテーマごとに全学年縦割りでチームをつくり、一年を通して活動に関わることによって、何かを企画し実行するという、自分で調べるということ、他の人に協力をお願いするというなど、社会で必要なことを学ぶとともに、言葉や数に関する知識を体験を通して身につけていくことを重視した学習である。

現在の日本の教育の中ではマイノリティではあるが、公的な認可を受けていることからわかるように、現行制度のなかに確かなポジションを確保した学校でもある¹。最近では、ドキュメンタリー映画「夢みる小学校」（オオタヴィン監督、2021年）²でも取り上げられ、注目を集めつつある³。

本書は、筆者が抱き続けてきた「学校とは？」「学びとは？」「生きるとは？」という問いを、一人の女の子の視点から探求するという構成になっている。

記された言葉はどれも真つすぐで迫力があり、そして切実である。生半可な解説は本書の価値を下げてしまうのではないかと逡巡しながらも、それでも一人でも多くの人に本書の存在を知ってほしいという思いから筆をとった。目次は以下の通りである。

はじめに

台風の中で生まれた

[絵本] がっこうはおとなたちがつくったちいさなせかい
学校ってなんだ? / 学校にいけない子どもたち / おとうさん、おかあさん、くらべないで / ある女の子の物語
学校を知らないということ。 / あなたの学校を教えてほしい。 / 行きたくないなら行かなくてもいい。 / あなたの知らない学校教育がここにひとつあるよ。
きのくに子どもの村学園 / 学園のあゆみ / きのくにのじかんわり

朝のような

みんなの言葉をつなぐ旅(ずっきー) / 遊ぶことの重要性(會田恵) / きのくにを卒業して、どんなことに興味を持ち、どんな生き方を選んだのか?どのように生きたいと思っているのか?(森井健介)

昼のように

ここから見える景色(小野田亮介) / どこに、行こうか。(Yuki) / みちこ、ズッキーとの再会(みちこ) / 私の半日(薮祐梨子) / 3足の草鞋を履いて(櫻井亮輔) / 私は今、きのくにと無縁の生活をしている。(松本加奈)

夜の中で

2019年12月31日19時59分(森井敦子) / 命との関り方(まいあ) / 「お父さん」に見えるりんご(河西愛也)

夜明け

きのくにでの時間(いつき) / とある田舎の教師と小さな考えごと(山上祐輝)

それから

サマーヒルのニールというひと。 / ニールの本。 / 公立の学校をでて、いっぱい勉強して大人になったのに、どうしてきのくにに子どもを入れようと思ったのか
「とこ」と「たっちゃん」のおはなし。 / 旅の中でみつけた、なくしもの
夜明け(雫森ゆかり)

ズッキー、公立の先生と対談する

おわりに

導入部となる絵本「がっこうはおとなたちがつくったちいさなせかい」では、学校に対してつらいと感じる「こころ」、そうした「こころ」ではなく学校の方を変えようとした「ほりじい」(堀)の名が登場する。「つらいがっこう」を変えていくための話がしたい。本書の試みが宣言されているパートである。

目次を挟んで配置された「台風の中で生まれた」には、女の子が初めて「問う」ということを知った瞬間が描かれている。「子どもは学校に行くもの」という「あたりまえ」に対して女の子は自らの言葉で No と言い、自分にとって何が良いことなのかの答えに向かって歩み始める。ただし、女の子が出会ったきのくには「光もありかげもある」場所である。「いまだにその全貌を掴むことができない」きのくに通して、筆者の探求が幕を開ける。

「朝」「昼」「夜」「夜明け」では、きのくにの卒業生の声とともに、それぞれに対する

筆者の回答が配置されている。登場する卒業生は、美容室経営者や獣医師、サイエンスコミュニケーターや芸術高校の副校長、子どもを育てるお母さんに武術研究者と顔ぶれは多彩である。寄稿者たちはきのくにでの生活を振り返りながら、現在の暮らしぶりや仕事の話、きのくにで身につけたこと、子どもの教育についての考えを綴っている。

「それから」では、きのくにを設立した堀の精神的支柱となった人物の一人、イギリスのアレクサンダー・サザーランド・ニール（1883-1973）が紹介されている。1921年にニールが設立した寄宿学校「サマーヒル・スクール」は、「世界でいちばん自由な学校」と言われている⁴。筆者はニールの言葉を引用しながら、一人でも多くの人に彼の声が届くことを願っている。

教育においては、子どもの後にしたいが、子どもを理解し、子どものダイナミックな願望に合わせる、というやり方しかない⁵。子どもを愛し、子どもの幸福を願うなら、それ以外に道はないのだ。（中略）子どもの時代は、遊びの時代である。大人時代の責任を子どものうちに負わされた者は、人生そのものを奪われたのと同じだ。

（『ニール選集② 問題の親』堀真一郎（訳）、黎明書房、2009年、p.109）

次いで、きのくにに我が子の入学を希望する保護者の声、そして、筆者にとっての現時点での思考がまとめられている。巻末にある公立の小学校の先生との対話では、公立小学校の現状やきのくにと公立の違い、共通点などが話題に挙げられている。

少しずつ変化する「夜明け」をモチーフとした図版の迫力と、それとは対照的で見る者を和ませるイラストが合わさり、本書の持つ独自の世界を引き立てている。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきた。「学校」の外にきのくにを見つけた筆者にとって、きのくにには間違いなく「救い」であった。しかし、話はそれで終わりではない。きのくにには、筆者がそれまで知っていたのとは全く違う学校ではあったが、そこでの出会いによって筆者の思考が終わったわけではない。

「学校」とは確かに違うが、ここで学び生きることは私にとってどういう意味があったのか。ほかの卒業生ひとりひとりの人生にとって、ここでの生活はどんな意味があるのか。

学び、学校、そして生きるということへの疑問は、きのくにでの生活を通して完結することなく、新たな問いとなって筆者を衝き動かしている。そうでなければ、この本は生まれなかったはず。評者はそのように受け取った。

女の子はきのくにに対して救いや充足感を確かに自覚する一方で、私にとってこの学校はどういう存在なのだろうかと問い続ける。女の子にとってきのくにには、昔も今も語りつくすことのできない何かがあるという言い方ができるかもしれない。

評者なりに引き継ぐならば、きのくににはこれからの学校のあり方にどのような可能性を投げかけるのか。これまで投げかけ続けてきた先にはどのような未来が想像しうるのか。筆者の問いは、学びや学校一般に関する問いに結びついている。

一般論ではあるが、主流のやり方から外れた事例はセンセーショナルに語られやすい。きのくににもその例外ではなく、「学力は大丈夫なのか？」「子どもはきちんと育つのか？」といった「心配」の声は常に付きまとう。当事者の意図とは無関係に、「公立の敵」と位

置付けられることもある。自分自身が慣れ親しんだのとは異なるやり方を否定の対象として本質化することは、マジョリティがマイノリティに振るう暴力の典型である。ただし、他者に対する否定のまなざしはマイノリティに位置付けられた人びとにとっても無縁ではない。筆者も述べるように、「公立」をひとまとめに「向こう側」に置いてしまうこともありうる。

しかし、当初、筆者のなかにあったかもしれない「自由なきのくに」と「不自由な公立」という二項対立的な認識は探求の過程でそのニュアンスを変化させている。

きのくに出会う前、「学校は敵だ」と思っていた私は、どうすれば学校でみんなと笑うことができたのか。まだ分からない。どうすれば、一緒に笑えるか。きっと、もっともっと話をしていかなきゃいけないね。

これからも、もっとずっと。たくさんの人たちと話していこう。

（「対談を終えて」より）

様々な立場の人との対話の末に納得できる答えが見えてくるはず。本書はそう結ばれている。

「子どもの学びを支援する」とは、現在の教育を語るキーワードである。このことに文字通り人生をかけて取組んできた人びとがいるということに、評者は子を持つ一人の保護者として大きな希望を感じている。同時に、「子どもを真ん中に置いた学校」が今なお卒業生にとっての問いの源泉となり続けていることに、一人の学究の徒としてわくわくしているのも確かである。

注

- 1 学校教育法第1条に基づいて認可された学校（1条校）であり、一般にいう「学校」を指す。
- 2 映画の中では文化人類学者の辻信一が登場し、卒業生の資質の高さを評価していた。
- 3 同様の取組みが北海道長沼町で進められている。きのくのにの理念に賛同した教員や保護者、地元農家を含めた有志を中心に、旧北長沼小学校の校舎を拠点にした「まおい学びのさと小学校」を開校しようという動きである。開校は2023年4月予定であり、本誌が刊行される頃には第1期生の通学が始まっているはずである。この間の経緯については、農業雑誌『ニューカントリー』（北海道協同組合通信社）での連載「まおい学びのさと小学校 開校までの道」（2022年3月号～連載中）を参照されたい。
- 4 ニールの思想に感銘を受けた堀は、サマーヒル・スクールのような学校を日本にも広めるべく「新しい学校をつくる会」を立ち上げるとともに、ニールの著作の翻訳を通して日本への浸透に奔走した。
- 5 子どもに対するこうした態度に関し、『子どもの文化人類学』（原ひろ子、晶文社、1979年）の冒頭に次のようなシーンがある。

アメリカ先住民の4歳4か月の女の子が小さな斧を振り上げて短い丸太を割る場面に著者は遭遇する。思わず「危ない！」と制止しそうになるのだが、思い直し、見守ることにした。女の子の手慣れた様子を見守るうち、著者の心はだんだんと落ち着いていった。

「大人は子どもが自ら育ってゆく力を信じて手を貸してあげられるだけなのではないか」（原1979：204）という気づきは、子どもの教育について人類学が教える知見でもある。

（いのうえ・あつき／茨城大学）